doi：10. 20776/S13482084-71-P79
千葉大学教育学部研究紀要　第71巻　79～89頁（2023）

大学スポーツ科目において英語を用いた実技を行うことに対する学生の意識について

下永田修二[1)]*・谷藤千香[2)]・岩井幸博[3)]・杉山英人[1)]・佐野智樹[1)]・小泉岳央[4)]

[1)]千葉大学・教育学部
[2)]千葉大学・国際教養学部
[3)]貞静学園短期大学・保育学科
[4)]千葉大学・教育学部・附属中学校

Student's Awareness of University Sports Class in English

SHIMONAGATA Shuji[1)]*, TANIFUJI Chika[2)], IWAI Yukihiro[3)], SUGIYAMA Hideto[1)], SANO Tomoki[1)] and KOIZUMI Takehisa[4)]

[1)]Faculty of Education, Chiba University, Japan
[2)]College of Liberal Arts and Sciences, Chiba University, Japan
[3)]Department of Early Child Care and Eduation, Teisei Gakuen Junior College, Japan
[4)]Junior High School Attached to Faculty of Education, Chiba University, Japan

グローバル化に対応した教育を推進するため，各教科と英語教育を関連させた取り組みが行われているが，体育・スポーツにおける取り組みは多くはみられず，課題が多く示されている。本研究では大学一般教養科目のスポーツ・健康科目の受講生を対象に，大学のスポーツ実技科目を英語で行うことに対する意識調査を行い，学生の実態を明らかにするとともに，全学的な全員留学プログラム導入前後における学生の意識の変化について検証することを目的とした。その結果，英語によるスポーツ実技授業の受講希望について性別，所属課外活動別に有意差はみられなかったが，全員留学プログラム導入後に，英語によるスポーツ実技授業受講希望が有意に向上する傾向が示された。また，英語，スポーツの嗜好度が英語によるスポーツ実技授業受講希望に大きく影響していることが明らかとなった。

There have been many projects of teaching subjects in English for the globalization in education. However, there were very few in physical education and sports field. The purpose of this study was to research student's awareness, desire and confidence in sports class in English and their change before and after introduction of global internship program.
The results suggested as follows:
1）There were no significant differences of student's eagerness to attend sports class in English between extra-curricular activities and, male and female.
2）After the global internship program, student's desire to attend sports class in English significantly increased.
3）Their main motivation was preference for sport and English.

キーワード：スポーツ（Sport），英語（English），グローバル（Global），CLIL（CLIL），体育（Physical Education）

1．はじめに

1.1　グローバル化に伴う英語教育の方向性

大学審議会（2000）が示した「グローバル化時代の高等教育の在り方について」の答申を受け，高等教育機関におけるグローバル人材育成の推進が示され，多くの大学においてグローバル化を見据えた教育の導入が検討されはじめた。文部科学省が2003年に示した「英語が使える日本人」の育成のための行動計画では，「中学校・高等学校を卒業したら英語でコミュニケーションができる」，「大学を卒業したら仕事で英語が使える」ことが日本人に求められる英語力として示された。また，2013年には「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」の「新たな英語教育の目標・内容等」において，「英語を用いて～することができる」という目標設定に対応する形で英語４技能を評価することを提案している。これは教科を超えた英語学習を推進することを示しており，この英語学習の効果を促進する手段として注目を集めているのが，内容言語統合型学習（CLIL）である。CLILは教科やあるテーマの学習と外国語の学習を組み合わせた言語習得法であり，日本の学校教育においても導入されはじめている（渡部良典ほか，2011；柏木・伊藤，2020）。さらに，2014年に文部科学省がスーパーグローバル大学創成支援事業を創設するなど，大学教育においてもグローバル化の波はさらに高まっており，これを見据えたカリキュラムの導入が現在も検討・推進されてい

*連絡先著者：下永田修二　shimo@faculty.chiba-u.jp

る（文部科学省，2014）。

1.2　体育・スポーツと英語とを関連させた教育の現状

グローバル化に対応した教育を推進するため，学校種別，教科別に英語教育と関連させた取り組みが行われている。体育・スポーツにおいても様々な取り組みが行われていると考えられるが具体的な活動に関する報告は多くはみられず，それぞれの報告の中で今後の課題等が多く示されている状況にある。

学校種別にみていくと，小学校では跳び箱運動，表現運動やチームスポーツの実践報告が行われている（濱本ほか，2020；岩城，2020；Josep・Teresa，2016）。濱本ら（2020）は小学校５，６年生への跳び箱運動におけるCLILの実践において，「Content」，「Communication」，「Cognition」，「Community」，「CLIL体育の可能性」の５つの成果を報告しているが，課題としても「Communication」，「Community」，「教師に関する課題」，「CLIL体育の課題」，「本授業の課題」，「その他」の６つのカテゴリーを示した。これはCLIL体育の実践によって英語教育および体育それぞれの内容に関する学習の成果と児童間のコミュニケーションの活性化を促進する可能性があることを示したが，教師の英語力，教材研究，教師の負担に関する課題が示され，今後も継続した研究，教材開発が必要であることを報告している。岩城（2020）は自分の思いやイメージをありのままに表現できる表現運動の特徴を踏まえ，小学校５年生におけるCLIL体育導入の領域として表現運動を選択し，実践を行っている。その結果，英語学習の理解と意欲について有意な向上がみられたこと，体育の評価においても児童の学習内容の理解を抑制するものではなかったと述べている。岩田ら（2018）は中学校器械運動（マット運動）におけるCLIL体育を実施した成果について報告している。その結果，マット運動における技能向上が確認されたが，シンクロ演技のようなオープンスキルによるグループ協議が必要な場面においては英語の使用頻度が減少していたことが報告され，CLIL体育においても局面ごとに配慮した導入が必要であることが述べられている。また，教師については教科横断的な教師の協同的支援が必要であることが示されている。高等学校における実践としては，大木・岡出（2019）によるネット型ゲームによる実践が報告されている。この報告では，短期間のプログラムではあるものの，英語に対する苦手意識の低減及び体育授業に積極的な参加を促す効果が示唆されたが，参加者が流動的であり，対象を固定し，仲間との相互評価の場面を設定するなど更なる検証が必要であると報告している。次に高等専門学校における実践では二五・伊藤（2017，2019，2021，2022）による複数の種目による報告がある。これまでサッカー，バレーボール，バスケットボールでの実践を通して，どの種目においても内容への興味では多くの学生が肯定的な回答を示し，積極的に英語を使用し，英語学習に効果があったと感じていることを明らかにしている。しかし，体育には個人種目をはじめ多くの種目があるため継続した実践，CLILに適した体育授業のモデル化を進めていく必要があると述べている。このように小・中学校から高等専門学校まで英語教育と体育を融合した授業実践ははじまったばかりであり，今後も継続した実践，研究が必要な段階にあるといえる。

ここで，大学における体育・スポーツ実践と英語とを関連させた教育に目を向けると，2014年に体育・スポーツと英語とを関連させた授業の実施状況を調査した小林ら（2014）の報告がある。この実態調査によると，回答が得られた大学の中で86.7％の大学が英語では体育授業を行っていないと報告している。また，今後英語での体育授業を開講する予定があると報告した大学は6.7％とこちらも低い傾向を示していた。しかし，英語で体育授業を行うための研修への参加希望については60％の大学が参加を希望しており，半数以上の大学が英語での体育授業について情報を収集し，研修を積んでいきたいという意向がうかがわれた。その後，いくつか英語で実施する体育に関する研修が行われたことが報告されており（木内敦詞・小林勝法，2015；飯田祥明，2015；小林勝法・McGrath, 2016; Anne et al., 2012），今後，更なる実践，研修，調査研究が必要な時期であることがうかがえる。

吉崎（1988）は授業についての教師の知識として「教材内容についての知識」，「教授方法についての知識」，「生徒についての知識」の３つを掲げ，これらの関連する領域が重要であることを示している。すでに述べてきた先行研究の内容は主に英語で実施する体育に関する「教材内容についての知識」，「教授方法についての知識」であり，英語で行う体育実技授業に関する「生徒についての知識」についても調査していく必要があると考える。これまで，この英語による体育実技授業に関する学生への調査としては，久保田・関田（2002）と常行・長谷川（2018）の報告がある。久保田・関田（2002）は，言語を教科として教授せずに，習得すべき言語の環境に学習者を位置づけるイマージョンプログラムと体育との関連について調査を行ったところ，英語に対する態度，体育に対する態度，英会話効力感，対人関係効力感の４項目に自信がある学生が体育のイマージョンプログラムに関心が高いことを報告している。常行・長谷川（2018）は，2014年から2015年に英語で実施される大学体育の授業における学生のニーズについて調査を行い，約半数の学生が英語を導入した体育実技について肯定的な意見を持っていたが，講義については全体の約３割と実技と比較して低い傾向が示されたことを報告している。

上述したように大学におけるグローバル人材育成の取り組みは高まってきている。これに伴い全員留学などの取り組みも実施され，この状況による学生の意識の変化についても調査していくことが今後の大学におけるCLIL体育の発展・導入に向けても必要であると考える。そこで本研究では大学において一般教養科目としてスポーツを受講している学生を対象に，大学のスポーツの実技科目を英語で行うことに対する意識調査を行い，学生の実態を明らかにすることを目的とした。また，全学的な全員留学プログラム導入前後に調査を行い，留学プログラム導入による学生の意識の変化についても考察を行うこととした。

２．方　　法

2.1　対象

本研究は，総合大学全学共通科目として開講されているスポーツ・健康科目のうち，担当教員及び受講生から協力の得られた授業を対象とした。対象大学は2020年度から留学プログラムや留学支援体制を強化しグローバル人材育成を推進していることから，このグローバル人材育成プログラムの導入される以前である2019年度と導入後の2021年度の受講生を対象とした。なお2021年度については，コロナ禍においても対面で実技が行われた授業を対象とした。グローバル人材育成プログラム導入後の学生は2021年度の受講生において１，２学年のみとなるため，調査に協力の得られた学生の中で１，２年生のみを抽出し，2019年度138名（男子：82名，女子：56名），2021年度136名（男子：51名，女子：85名）を対象とした（表１）。

2.2　調査項目

常行・長谷川（2018）の調査項目を参考にし，英語，スポーツに関する嗜好度，有能感，英語によるスポーツ実技授業受講希望（以後，略称を用いるときは受講希望と示す）について４件法にて調査を行った。嗜好度については４：好き，３：どちらかといえば好き，２：どちらかといえば嫌い，１：嫌いの４段階，有能感については４：得意，３：どちらかといえば得意，２：どちらかといえば不得意，１：不得意の４段階で調査を行った。受講希望については４：受講したい，３：どちらかといえば受講したい，２：どちらかといえば受講したくない，１：受講したくないの４段階で調査し，その理由については自由記述で回答してもらった。また，課外活動の参加状況についてはその他を含めた５項目（体育会，体育系サークル，文化系サークル，活動していない，その他）から選択してもらい，英語でスポーツ実技を行うとした場合行ってみたい種目についても自由記述で回答してもらった。

2.3　分析項目・方法

それぞれの年度ごとの平均，標準偏差を求め年度間の比較においては，Kruskal-Wallis検定およびMann-Whitneyの U 検定を用いた。受講希望と英語，スポーツに関する嗜好度，有能感についてはそれぞれSpearmanの順位相関係数を算出した。受講希望を目的変数とし，その他の変数を説明変数とした重回帰分析ステップ・ワイズ法を用い，受講希望への説明力が強い項目について分析を行った。また，性別および所属する課外活動の違いと英語によるスポーツ実技授業受講希望との関係についても比較分析を行った。統計処理には，Microsoft社製Excel for Mac16.65およびRstudio2022.07.1を用い，有意水準は５％未満とした。自由記述については英語によるスポーツ実技授業受講希望の回答が４：受講したい，３：どちらかといえば受講したいの肯定的回答をしたグループと２：どちらかといえば受講したくない，１：受講したくないの否定的回答をしたグループに分けそれぞれのグループにおける記述をKJ法を用いて分析し，分類カテゴリー分けを行った。

表１　調査対象者の属性

（名）

年度	2019	2021
対象者	138	136
性別		
男子	82	51
女子	56	85
学年		
第１学年	135	109
第２学年	3	27
学部		
文系	46	90
理系	66	32
医療系	26	14

３．結　　果

3.1　調査年度，性別による比較

対象学生の調査年度ごとの英語およびスポーツに関する嗜好度，有能感，英語によるスポーツ実技授業受講希望の結果を表２に示した。英語の嗜好度，スポーツの嗜好度，英語の有能感，スポーツの有能感においては，2019年度と2021年度との間で有意差はみられなかった。年度ごとの英語・スポーツの嗜好度・有能感に関する項目間では，2019年度はスポーツの嗜好度とその他の３項目との間にのみ１％水準で有意差が認められた。2021年度は，英語の嗜好度とスポーツの有能感の間には有意差が認められなかったがそれ以外の項目間においては１％水準で有意差が認められた。受講希望については，2019年度は2.11±0.95，2021年度が2.53±0.92と2021年度学生の受講希望が５％水準で有意に高い結果が得られた。

各質問項目の調査年度ごとの性別による比較を行ったところ，2019年度のスポーツの有能感において，男子が2.71±0.97，女子が2.41±0.80と５％水準で男子が女子よりも有意に高い傾向を示した（表３）。2019年度と2021年度を合わせた結果においてもスポーツの有能感において同様に５％水準で有意差が認められた。しかし，その他の項目においては，英語によるスポーツ実技授業受講希望も含めて性別による有意差はみられなかった。

3.2　各調査項目間の相関係数

次に，各年度それぞれの調査項目ごとの順位相関係数を求めた結果を表４，５に示した。2019年度，2021年度

表２　各調査項目の調査年度ごとの比較

年度	2019	2021	
英語の嗜好度	2.72±1.00	2.82±0.83	n.s.
スポーツの嗜好度	3.29±0.75	3.45±0.68	n.s.
英語の有能感	2.43±0.92	2.26±0.85	n.s.
スポーツの有能感	2.59±0.91	2.60±0.85	n.s.
受講希望	2.11±0.95	2.53±0.92	＊＊

＊＊：$p<0.01$

表３　各調査項目の性別による比較

年度	2019			2021		
	男子	女子		男子	女子	
英語の嗜好度	2.67±1.02	2.79±0.96	n.s.	2.67±0.81	2.92±0.83	n.s.
スポーツの嗜好度	3.34±0.75	3.21±0.75	n.s.	3.45±0.72	3.45±0.66	n.s.
英語の有能感	2.41±0.97	2.45±0.82	n.s.	2.14±0.95	2.34±0.78	n.s.
スポーツの有能感	2.71±0.97	2.41±0.80	＊	2.67±0.98	2.56±0.78	n.s.
受講希望	2.09±1.01	2.14±0.85	n.s.	2.41±0.97	2.60±0.88	n.s.

＊：p＜0.05

表４　2019年度の調査項目間の相関係数

	英語の嗜好度	スポーツの嗜好度	英語の有能感	スポーツの有能感
スポーツの嗜好度	0.110			
英語の有能感	0.761＊＊	0.070		
スポーツの有能感	0.070	0.641＊＊	0.199＊	
受講希望	0.497＊＊	0.297＊＊	0.417＊＊	0.153

＊：p＜0.05，＊＊：p＜0.01

表５　2021年度の調査項目間の相関係数

	英語の嗜好度	スポーツの嗜好度	英語の有能感	スポーツの有能感
スポーツの嗜好度	0.140			
英語の有能感	0.637＊＊	0.126		
スポーツの有能感	0.074	0.670＊＊	0.243＊＊	
受講希望	0.325＊＊	0.250＊＊	0.101	0.178＊

＊：p＜0.05，＊＊：p＜0.01

ともに英語の嗜好度-英語の有能感，スポーツの嗜好度-スポーツの有能感において１％水準で有意な相関関係を示した。英語とスポーツの関係性においては，英語の有能感-スポーツの有能感の間に2019年度５％水準，2021年度１％水準の有意な相関が認められたが，相関の強さとしては弱い相関であった。スポーツ実技授業受講希望と英語・スポーツの嗜好度・有能感の関係においては，英語の嗜好度，スポーツの嗜好度との関係においてどちらの年度も１％水準の有意な相関関係が認められた。また，英語の有能感と英語によるスポーツ実技授業受講希望においては2019年度のみ１％水準で，スポーツの有能感と英語によるスポーツ実技授業受講希望においては2021年度のみ５％水準で有意な相関関係がみられた。2019年度と2021年度の調査結果を合わせて英語によるスポーツ実技授業受講希望を目的変数とし，その他変数を説明変数としたステップ・ワイズ法による取捨選択を行ったところ，英語およびスポーツの有能感は削除され，英語の嗜好度（r＝0.426，p＜0.01）およびスポーツの嗜好度（r＝0.299，p＜0.01）が説明変数として選択された。

3.3　課外活動所属別の比較

日頃からスポーツを行なっているかどうかによる影響を把握するため課外活動所属別の比較を行った（表６）。なお，それぞれの所属の特徴を比較するため複数の活動に参加している学生は除き，2019年度，2021年度合わせて比較を行った。英語の嗜好度については体育会部活動に所属している学生は文化系サークル（１％水準），体育系サークル（５％水準）に所属する学生と比較して低い傾向がみられた。スポーツの嗜好度と有能感においては体育会部活動と体育系サークルに所属する学生が文化系サークル，無所属の学生と比較して有意に高い結果が得られた。しかし，英語の有能感およびスポーツ実技授業受講希望については課外活動所属別に有意差は認められなかった。

3.4　英語でスポーツ実技を行う場合の受講希望種目

英語でスポーツ実技授業を行う場合に行なってみたい種目・内容について調査を行った結果を表７に示した。具体的な種目名ではなく抽象的な説明による回答は類似するものをまとめ，複数回答がみられた種目・内容について表記した。最も多く回答が得られた種目はサッカーで35件，次いでバスケットボール（26件），バレーボール（19件）と団体球技スポーツが上位を占めていた。また，抽象的な説明としてみられたものはルールが簡単なスポーツ（９件），みんなが楽しめるスポーツ（４件），ジェスチャーでなんとかなるようなスポーツ（３件），世界で広く行われているスポーツ（３件），英語圏で有名なスポーツ（３件）という内容であった。

3.5　英語でスポーツ実技授業を行うことに関する自由記述

英語によるスポーツ実技授業受講希望の回答が４：受講したい，３：どちらかといえば受講したいの肯定的回答をしたグループの自由記述を分析した結果を表８に，２：どちらかといえば受講したくない，１：受講したくないの否定的な回答をしたグループの自由記述を分析し

表６　課外活動所属別の比較

	体育会部活動	体育系サークル	文化系サークル	無所属	
人数	48	77	53	51	
英語の嗜好度	2.38 ± 0.93	2.84 ± 0.95	2.94 ± 0.78	2.67 ± 0.94	体育会-文化系：＊＊，体育会-体育系：＊
スポーツの嗜好度	3.56 ± 0.70	3.66 ± 0.55	3.02 ± 0.75	3.14 ± 0.71	体育会-文化系：＊＊，体育会-無所属：＊＊ 体育系-文化系：＊＊，体育系-無所属：＊＊
英語の有能感	2.04 ± 0.82	2.42 ± 0.86	2.50 ± 0.84	2.31 ± 0.98	n.s.
スポーツの有能感	2.96 ± 0.76	2.86 ± 0.08	2.23 ± 0.92	2.39 ± 0.97	体育会-文化系：＊＊，体育会-無所属：＊ 体育系-文化系：＊＊，体育系-無所属：＊
受講希望	2.31 ± 0.96	2.52 ± 0.95	2.12 ± 0.94	2.08 ± 1.01	n.s.

表７　英語によるスポーツ実技で行ってみたい種目・内容

種目・内容	回答数
サッカー	35
バスケットボール	26
バレーボール	19
野球・ソフトボール	12
バドミントン	11
ダンス	10
ルールが簡単なスポーツ	9
テニス	8
エクササイズ・フィットネス・エアロビクス・ヨガ等	8
チームスポーツ	7
武道（空手・柔道・相撲・弓道・剣道）	6
ドッジボール	6
ラグビー	5
アルティメット	5
卓球	4
みんなが楽しめるスポーツ	4
陸上競技	3
クリケット	3
ジェスチャーでなんとかなるようなスポーツ	3
ニュースポーツ	3
世界で広く行われているスポーツ	3
英語圏で有名なスポーツ	3
セパタクロー	2
ｅスポーツ	2
パラスポーツ（ボッチャ等）	2
球技	2
ラクロス	2

た結果を表９に示した。肯定的な回答群では105個の事例が，否定的な回答群では153個の事例が得られた。以下に事例をもとに生成したカテゴリーおよびサブカテゴリーについて示す（以下，カテゴリー名には【　】，サブカテゴリー名には［　］をつけて示した。また，質問に対して適切に回答できていない，意味が取れなかったもの（【その他】のカテゴリー）は除いた。

肯定的回答群は，【好意的な態度】，【スポーツ活動を通した英語力向上】，【挑戦的態度】，【コミュニケーション能力の向上】，【英語の使用頻度の向上】，【将来につながる】という６個のカテゴリーから構成された。以下にカテゴリーを構成するサブカテゴリーについて示した。

【好意的な態度】については，［楽しそう］，［面白そう］，［実践的な英語が好き］という３つのサブカテゴリーから構成された。【スポーツ活動を通した英語力向上】では，［英語力向上］，［スポーツ活動中の英語の使い方］，【コミュニケーション能力の向上】は［コミュニケーションの促進］，［外国人との交流］，［仲が深まる］，［リアクション］，［非言語コミュニケーション］の５つのサブカテゴリーから構成された。

否定的回答群は，【活動の難易度に関する課題】，【英語や体育の苦手意識】，【活動に対する不明確要素の存在】，【スポーツ活動に対する影響】，【日本語へのこだわり】，【コミュニケーションに関する課題】，【英語とスポーツの不調和感】，【活動に対する不安】，【安全面に関する不安】，【時間的な非効率性】，【留学生との交流への期待感】

表８　肯定的回答群の自由記述内容

105事例

カテゴリー	サブカテゴリー	事例
好意的な態度（40）	楽しそう（28）	運動をしながら英語を学ぶことができ，どちらも楽しむことができると思うから
	面白そう（11）	面白そうだから
	実践的な英語が好き（１）	座学での英語は苦手だが，実践的な英語は好きだから
スポーツ活動を通した英語力向上（23）	英語力向上（14）	英語の勉強にもなって体も動かせるから
	スポーツ活動中の英語の使い方（９）	スポーツでの英語の使い方を知らないから
挑戦的態度（18）		今までやったことがないので気になるから
コミュニケーション能力の向上（17）	コミュニケーションの促進（５）	スポーツを通して英語を学ぶとコミュニケーション力がつくとともに，スピーキングとリスニング能力がつきやすいと考えるから
	外国人との交流（４）	外国の人とスポーツを通してコミュニケーションがとれる
	仲が深まる（３）	運動は英語の垣根を超えて，他の人と仲良くなるから
	リアクション（３）	外国人はリアクションが大きいイメージがあるのでテンション高く楽しめそうだから
	非言語コミュニケーション（２）	言葉がなくても通じそうだから
英語の使用頻度の向上（１）		英語に触れる機会がほしいから
将来につながる（１）		将来，役に立つときが来そう
その他（５）		

という11個のカテゴリーから構成された。以下にサブカテゴリーを示した。

【活動の難易度に関する課題】は，［内容理解に対する不安］，［英語によるスポーツ実施の困難さ］，［指示・助言の理解に対する不安］，［ルールの理解に対する不安］，［技術の理解に関する不安］の５つのサブカテゴリーから構成された。【英語や体育の苦手意識】は，［英語に対する苦手意識］，［スポーツに対する苦手意識］の２つのサブカテゴリーから構成された。【活動に対する不明確要素の存在】は，［活動意図の不明確性］，［活動に対する負担感］，［必要性の実感不足］の３つのサブカテゴリーから構成された。【スポーツ活動に対する影響】は，［スポーツの楽しさの享受への課題］，［スポーツ活動への集中への阻害］の２つのサブカテゴリーから構成された。【日本語へのこだわり】は，［日本語優先］，［無意識による日本語使用］の２つのサブカテゴリー，【コミュニケーションに関する課題】は，［コミュニケーション形成への不安］，［チームワーク形成への不安］の２つのサブカテゴリーから構成された。

４．考　　察

4.1　調査年度間および性別による学生の意識の差異

調査年度による，英語・スポーツの嗜好度，英語・スポーツの有能感の間には有意差は認められなかった。今回の調査対象はスポーツ・健康科目の全体からすると一部ではあるが，全ての学部の学生が含まれており，調査を行なった２年で同様の傾向を示したことから全学的な傾向であることが推察される。項目間の比較においては４項目の中で，スポーツの嗜好度が有意に高い傾向を示しており，受講生のスポーツに対する愛好度が高いことがうかがえる。また，2020年度に全学的なカリキュラム変更が行われ，2019年度時点では必修科目であったスポーツ・健康科目が，2020年度以降は選択科目となっており，2021年度受講学生は教育学部を除いて選択科目となっている。しかし，調査年度間の４項目の比較においては有意差が認められなかったことから受講している学生の英語・スポーツに関する意識に大きな変化はないことが推察される。

今回の調査項目で唯一有意差が認められた項目は，英語によるスポーツ実技授業受講希望であった（2019年度：2.11±0.95，2021年度：2.53±0.92，$p<0.01$）。2019年度と比較して2021年度の受講生の方が有意に高い傾向を示した。これは，先ほど述べた2020年度のカリキュラム変更と関連していることが考えられる。2020年度から全員留学プログラムが採用されており，単位取得を伴う海外留学が必修となっている。実際にはコロナ禍の影響でオンラインによるプログラム等が実施されているが，英語による活動に対する興味・関心が入学当初から高い傾向が考えられ，英語によるスポーツ実技授業についても積極的な姿勢がみられたと考えられる。常川・長谷川（2018）は2015年から2016年にかけて同様な調査を行い，「受講したい」，「どちらかと言えば受講したい」が合わせて49.1％であったという結果を示している。今回の調査結果を同じように百分率にて示すと，2019年度が32.4％，2021年度が53.7％であり，2021年度については常川・長谷川（2018）の先行研究よりも高く，この比較からもグローバル人材育成プログラムの導入によりスポーツ実技授業を受講する希望が高くなり，授業導入の有効性が高くなっている傾向があることが推察される。

調査年度ごとの性別による比較では2019年度に行なったスポーツの有能感にのみ有意差が認められ，男子学生

表９　否定的回答群の自由記述内容

153事例

カテゴリー	サブカテゴリー	事例
活動の難易度に関する課題（40）	内容理解に対する不安（17）	言われていることがわからないと何をすれば良いかわからずつまらなくなってしまいそうだから
	英語によるスポーツ実施の困難さ（８）	英語でスポーツをするのは難しいと思う
	指示・助言の理解に対する不安（７）	指示がわからない。アドバイスをもらっても理解できないこと
	ルールの理解に対する不安（６）	英語で実施することによってルールをちゃんと理解できない事態になる可能性がある
	技術の理解に関する不安（２）	コツをわかりやすく教えてほしい。英語だと理解できないかもしれないから
英語や体育の苦手意識（28）	英語に対する苦手意識（18）	英語が苦手だから
	スポーツに対する苦手意識（10）	ただでさえ苦手なスポーツについて英語で講義された場合，理解できない可能性が高いから
活動に対する不明確要素の存在(21)	活動意図の不明確性（10）	英語でやる意義が何なのか思いあたらない
	活動に対する負担感（６）	面倒くさそう
	必要性の実感不足（５）	わざわざ英語でする必要性を感じない
スポーツ活動に対する影響（14）	スポーツの楽しさの享受への課題（12）	英語の学習とは別に純粋にスポーツを楽しみたいから
	スポーツ活動への集中の阻害（２）	英語もスポーツも好きだが混ぜると集中できなそうだから
日本語へのこだわり（13）	日本語優先（11）	やり方のコツは日本語の方が伝わりやすいと思うから
	無意識による日本語使用（２）	スポーツに夢中になり，日本語を話してしまいそうだから
コミュニケーションに関する課題(12)	コミュニケーション形成への不安（11）	コミュニケーションをとるのが難しそう
	チームワーク形成への不安（１）	チームワークが取りずらそう
英語とスポーツとの不調和感（５）		英語は英語で，スポーツはスポーツで学びたいから
活動に対する不安（３）		スポーツ中に英会話をし切れる自信がないから
安全面に関する不安（３）		指示がわからなくなる。わからないであいまいにすると，怪我をしてしまう
時間的な非効率性（２）		英語を理解するだけで時間がかかり，実践することに時間を使うことが難しくなるから
留学生との交流への期待感（２）		留学生とならわかる
その他（10）		

の方が女子学生より有意に高い結果を示した（男子：2.71±0.97，女子：2.41±0.80）。岡沢ら（1996），古田・黒坂（2010）は大学生の運動有能感の性別による違いを調査しており，運動有能間の因子のうち「受容感」を除いた「身体的有能さの認知」，「統制感」の因子において，男子が女子よりも有意に高い傾向を示している。2019年度の結果はこの先行研究と同様な性別による違いを示したことが考えられる。しかし，2021年度においては，男女間に有意差が認められなくなった。この理由として，2021年度は選択科目となったことによりスポーツへの有能感が低い学生は受講しないという選択肢ができたことが可能性の一つとして考えられるが，この要因については不明である。池田・福森（2005）は大学生の英語学習と動機づけの関係を調査する上で性別による差についても言及し，英語の嗜好（英語は好きである）という項目で女子の方が男子よりも有意に高い傾向があることを示している。これらの研究から英語・スポーツの嗜好については性別による差がみられる傾向にあるが，英語によるスポーツ実技授業受講希望については性別による有意差は認められなかった。

4.2　調査項目間の相関

調査年度ごとに各調査項目間の相関関係を求めたところ，2019年度，2021年度ともに英語の嗜好度-有能感，英語の嗜好度-受講希望，スポーツの嗜好度-有能感，スポーツの嗜好度-受講希望において１％水準で有意な相関関係が示された。この結果は好きであることと能力の自己評価は英語，スポーツともに強く関連していることを確認する結果となった。また，受講希望については英語・スポーツともに嗜好度との関係が高いことが示された。しかし，英語・スポーツの有能感と受講希望との相関関係においては調査した２年間で同一の傾向は示さず，英語の有能感と受講希望については2019年度のみ１％水準で，スポーツの有能感と受講希望については2021年度

のみ５％水準で有意な相関が認められた。2021年度のスポーツの有能感と受講希望の相関係数は0.178であり相関関係の強さとしてはほとんど相関がないレベルであり，受講希望との関係において，英語，スポーツの有能感は影響力が低く，好きかどうかという嗜好度の影響が大きいことが示された。２年間の調査データをまとめてステップ・ワイズ法による多変量解析を行なったところ，英語の嗜好度（$r=0.426$，$p<0.01$）およびスポーツの嗜好度（$r=0.299$，$p<0.01$）が説明変数として選択され，英語の嗜好度による相関係数が最も高く，大きく影響していることが示された。この結果から，英語によるスポーツ実技授業は英語を好きな学生にとってより受け入れやすい授業になる可能性が示された。

4.3　学生の課外活動所属別調査項目間の比較

２年間の調査結果を合わせて課外活動所属別に比較を行なった結果，英語の嗜好度，スポーツの嗜好度，スポーツの有能感について有意差が認められた。スポーツの嗜好度・有能感については，体育会・体育系サークルと文化系サークル・無所属学生との間に有意差があり，体育会・体育系サークルに所属する学生が高い値を示す結果となった。また，英語の嗜好度については，体育会部活動が文化系サークルおよび体育系サークルと比較して有意に低い傾向にあり，英語の有能感では有意差はないものの体育会部活動の学生は他の所属学生と比較して低い傾向にあった。牧野（2010）はスポーツ学生を対象にした英語の授業に関する研究において，スポーツ学生は英語に苦手意識を持っている傾向がみられると述べている。しかし，スポーツ学生もスポーツに関連する教材を用い，外国の選手とのコミュニケーションをテーマとしたアクティビティを中心にした内容またはさまざまなスポーツ場面を想定した実践練習を取り入れることにより英語学習に対する意欲が向上したことを報告している。Jugovic（2006），金丸（2009），朴澤ら（2019a；2019b）も体育スポーツ系学生に対する英語教育において同様の考察を行っていた。これらの先行研究の対象者は体育･スポーツ系大学，学部に所属する学生であり本研究における体育会部活動の学生とは学部の所属は異なる。しかし，本研究の体育会部活動の学生は他の学生と比較すると英語に関する嗜好度・有能感は低い傾向にある。これらのことから体育会部活動に所属する学生はスポーツと関連した英語授業により高い興味があり，英語によるスポーツ実技授業受講希望においては有意差がなくなっていることが考えられる。

4.4　英語によるスポーツ実技授業で行ってみたい種目・内容

表７に示した英語でスポーツ実技授業を行うとした場合に行なってみたい種目・内容において上位を占めた種目は，サッカー，バスケットボール，バレーボールなどの団体球技スポーツであり，プレー中にコミュニケーションが必要な種目が上位を占める結果となった。先の高等専門学校においてCLILを実践している二五・伊藤（2017，2019，2021）の３種目と一致する結果となった。これは授業を受ける側，指導する側どちらからみても団体球技スポーツが行いやすいイメージがあることが考えられる。具体的な種目名ではない回答においては，ルールが簡単なスポーツ，ジェスチャーでなんとかなるようなスポーツのように，英語での実施に向けて難易度が低いスポーツをあげている傾向がみられた。また，世界で広く行われているスポーツ，英語圏で有名なスポーツという回答からはルールや技術の英語表現が既知である種目が実践しやすいというイメージがあることが推察される。二五・伊藤（2022）の最近の実践ではパラスポーツであるボイスパスゴールを行っており，今回の調査結果からもパラスポーツという回答が２件であるがみられた。東京オリンピック・パラリンピックが行われたことからパラスポーツの知名度があがったこと，ボッチャなど種目によっては交流を促進する効果も得やすいことから英語での実践が行いやすいと捉えていることがうかがわれる。

4.5　英語でスポーツ実技授業を行うことに関する学生の意識

英語によるスポーツ実技授業受講希望において肯定的な回答をした学生の自由記述では［楽しそう］［面白そう］［実践的な英語が好き］と【好意的な態度】が40件と全体の38.1％を占めていた。磯村（2021）は中学校３年生を対象にマット運動の単元の一部でCLIL的な活動を行い，生徒の自由記述を分析している。その結果，内容の視点および思考・協学の視点において，楽しかった，面白かったと好意的なコメントが多く見られたことを報告している。英語によるスポーツ実技授業受講希望には英語・スポーツの嗜好度が大きな影響があることが示されたことからも【好意的な態度】が重要であることを示す結果となった。２番目以降は【スポーツ活動を通した英語力向上】，【挑戦的態度】，【コミュニケーション能力の向上】の順に回答が多かった。二五・伊藤（2017，2019，2021，2022）のCLIL体育後の自由記述の内容において，良かった点には「熟語・単語を覚える」「英語を楽しく学べる」など【スポーツ活動を通した英語力向上】に関するコメント，「いつもとは違う状況でやったので楽しかった」などの【挑戦的態度】，「コミュニケーションがとりやすかった」などの【コミュニケーション能力の向上】が含まれており，本研究の肯定的な回答と類似しており，実際にCLIL体育を行った後に受講者が感じた成果と同様な効果が意識されていることが示された。

英語によるスポーツ実技授業受講希望において否定的な回答をした学生の自由記述では【活動の難易度に関する課題】が40件（26.1％）と最も多く，［内容理解に対する不安］，［英語によるスポーツ実施の困難さ］，［指示・助言の理解に対する不安］，［ルールの理解に対する不安］，［技術の理解に関する不安］の５つのサブカテゴリーから構成された。この５つのサブカテゴリーは，指導内容・方法に関わってくる項目であると考えられる。三留ら（2018），Celina・Oscar（2017）は調査の中でCLIL体育を実施する教員について考察を行っている。この考察に共通して見られた課題としては，教員の負担，語学力不足から授業を計画・実践していくことに課題があると報告している。【活動の難易度に関する課題】のカテゴ

リーはこの授業の内容に関わることであり，教員，学生ともに抱えている課題であることがうかがえた。【英語や体育の苦手意識】では，［英語に対する苦手意識］，［スポーツに対する苦手意識］の両方の苦手意識が示される結果となった。これは事前に予想された大きな課題ではあるが，磯村（2021）の中学生を対象としたマット運動におけるCLIL体育の実践において，生徒の記述から「マットは嫌いだが英語の要素があり楽しかった」というコメントも見られ，実践してみることで意識が変化する可能性があることも考えられる。また，牧野（2010），Jugovic(2006)，金丸（2009），朴澤ら（2019a；2019b）が示しているように苦手意識のある学生への対応は常に検討が求められる項目であり，指導における課題を示すカテゴリーであると考える。【活動に対する不明確要素の存在】では，［活動意図の不明確性］，［活動に対する負担感］，［必要性の実感不足］の３つのサブカテゴリーから構成された。このカテゴリーは，スポーツ活動において日本語以外の外国語を使う必要性に疑問を感じている学生がいることを示していた。【スポーツ活動に対する影響】は，［スポーツの楽しさの享受への課題］，［スポーツ活動への集中への阻害］の２つのサブカテゴリーから構成された。岩田・赤松（2019）はこの英語によるスポーツ実践のスポーツに対する影響に関して，体育×英語の授業における「体育手段論」について言及し，「英語で体育をやって技能は身につくのですか？」という課題を掲げている。この【スポーツ活動に対する影響】は，英語によるスポーツ活動によるスポーツ活動へのマイナスの影響を感じている学生がみられたことを示している。【日本語へのこだわり】は，［日本語優先］，［無意識による日本語使用］の２つのサブカテゴリーから構成され，スポーツに夢中になると無意識のうちに日本語を発してしまうことを想定していると考えられる。実際にこれまでに行われた実践においては，日本語の使用を禁止するのではなく，英語と日本語を併用する授業展開がほとんどであり，これは体育授業の本質から逸れないようにすることが大切であることを理由としてあげている(二五・伊藤，2022；湯本，2003)。特にバスケットボールのような試合展開がはやい競技では英語使用も難しかったと報告されていることから，日本語使用も許容しながら授業実践を行うことが大切であることを示すカテゴリーであるといえる（二五・伊藤，2021)。【コミュニケーションに関する課題】は，［コミュニケーション形成への不安］，［チームワーク形成への不安］の２つのサブカテゴリーから構成された。コミュニケーションについては，肯定的な回答においてもカテゴリーに含まれていたことから，スポーツ実技に対するプラスとマイナス両方の影響があると学生が感じており，授業を計画・実践する場合には検討が必要な要素であることがうかがえる。

このように，学生の自由記述で示された部分は，これまで小学校・中学校・高等学校および高等専門学校において授業実践・調査・報告が行われてきた内容と一致することが多く，学生は英語によるスポーツ実技を実践することによる効果および課題についておおよそ意識ができていることが考えられる。このことから，これまでの研究も踏まえ，大学スポーツ科目において英語によるスポーツ実技授業をどのように実践していくのかについても今後，検討していく必要があると考える。

５．ま と め

本研究では大学において一般教養科目としてスポーツ・健康科目を受講している学生を対象に，大学のスポーツの実技科目を英語で行うことに対する意識調査を行い，学生の実態を明らかにすること，また，全学的な全員留学プログラム導入前後に調査を行い，留学プログラム導入による学生の意識の変化について検証することを目的とした。その際，量的な調査として，英語，スポーツに関する嗜好度，有能感，英語によるスポーツ実技授業受講希望，課外活動の参加状況について調査し，質的な調査として英語でスポーツ実技を行う場合に行ってみたい種目とその理由に関する自由記述を収集し，分析を行った。

その結果，⑴全学的な全員留学プログラム導入前後で，英語・スポーツの嗜好度・有能感について有意差はみられなかったが，英語によるスポーツ実技授業受講希望に関する項目にのみ有意差がみられ，全員留学プログラム導入後が高いことが明らかとなった。⑵性別による比較において，2019年度のスポーツの有能感に有意差がみられ，男子が女子より高い値を示したが，英語によるスポーツ実技授業受講希望において男女間に有意差はみられなかった。⑶各調査項目間の相関係数では英語嗜好度と有能感，スポーツの嗜好度と有能感の間に有意な相関がみられた。多重比較分析ステップ・ワイズ法の結果から英語によるスポーツ実技授業受講希望に対しては英語の嗜好度，スポーツの嗜好度が説明変数として有意であることが示され，英語の嗜好度の影響が最も大きいことが明らかとなった。⑷所属課外活動別の比較では，スポーツの嗜好度・有能感および英語の嗜好度において，所属別に有意差はみられたが，英語によるスポーツ実技授業受講希望においては所属間に有意差はみられなかった。⑸英語でスポーツ実技を行う場合に行ってみたい種目については，サッカーが最も多く，集団球技種目が上位を占める傾向にあった。⑹自由記述における肯定的な意見の記述内容としては【好意的な態度】【スポーツ活動を通した英語力向上】【挑戦的な態度】【コミュニケーション能力の向上】が上位のカテゴリーとして示された。【好意的な態度】のサブカテゴリーは［楽しそう］［面白そう］などであり，英語によるスポーツ実技実践には嗜好度が重要であるという結果が得られた。自由記述における否定的な意見の記述内容としては【活動の難易度に関する課題】【英語や体育の苦手意識】【活動に対する不明確要素の存在】【スポーツ活動に対する影響】【日本語へのこだわり】【コミュニケーションに関する課題】というカテゴリーが見られた。【活動の難易度に関する課題】は授業の準備，開発に関連することであり，【スポーツ活動に対する影響】はスポーツ活動の学習成果に，【日本語へのこだわり】はスポーツ実践中の日本語使用に関する内容であり，どれも現在のCLIL体育の課題として示されている項目であり，学生の意識からも英語によるスポーツ実技実践に必要な課題が示されることが明らかと

なった。コミュニケーションについては，肯定的・否定的な意見両方に含まれており，英語でスポーツ実技を行う場合の重要事項であることがうかがえる。今回の研究結果から英語によるスポーツ実技授業に対する学生の意識の傾向が明らかになった。今後，実際に大学生が英語でスポーツ実技授業を行うためのカリキュラム開発，実践による成果の検証，さらには，小学校から大学まで体育・スポーツ教育と英語教育との縦断的な取り組みについて検討していくことが課題となるであろう。

参考文献

1）大学審議会（2000）「グローバル化時代の高等教育の在り方について」の答申 https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/siryo/attach/1318742.htm,(参照日 2022年９月７日).

2）文部科学省（2003）「英語が使える日本人」の育成のための行動計画 https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryo/04031601/005.pdf,（参照日 2022年９月７日).

3）文部科学省（2013）「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryo/04031601/005.pdf,（参照日 2022年９月７日).

4）渡部良典・池田真・和泉伸一（2011）CLIL　内容言語統合型学習，上智大学出版.

5）柏木賀津子・伊藤由紀子（2020）小・中学校で取り組むCLIL授業づくり，大修館書店.

6）文部科学省（2014）スーパーグローバル大学創成支援，https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/sekaitenkai/1360288.htm,（参照日 2022年９月７日).

7）濱本想子・白石智也・赤松一成・敖敦其其格・白石愛・辻亮太・大城穂乃香・磯村美菜子・岩田昌太郎(2020)小学校におけるCLIL体育の授業実践に関する事例研究―「跳び箱運動×感嘆詞」の内容的視点から―，学校教育実践学研究，26：47-58.

8）岩城節臣（2020)CLILを導入した表現運動の実践，体育科教育，３：48-51.

9）Josep Coral・Teresa Lleixâ(2016)Physical education in content and language integrated learning: successful interaction between physical education and English as a foreign language, International Journal of Bilingual Education and Bilingualism, 19(1), 108-126.

10）岩田昌太郎・齊藤一彦・伊藤真・三村真弓（2018）グローバル人材育成に資する教科連携型のContent and Language Integrated Learning（CLIL）の実証研究：中学校における技能教科のパイロット・スタディ，広島大学大学院教育学研究科協同研究プロジェクト報告書，16，31-40.

11）大木昌俊・岡出美則（2019）体育授業と英語発話の融合が双方にもたらす自信と効果に関する研究―ソフトバレーボールに焦点をあてて―，日本体育大学大学院教育学研究科紀要，３(1)：177-186.

12）二五義博・伊藤耕作（2017）高専１年生に対する体育CLILの可能性―英語を使用したサッカーの授業を事例として―，大学英語教育学会中国・四国支部研究紀要，14，125-142.

13）二五義博・伊藤耕作（2019）高専１年生に対する体育CLILの可能性(2)―英語を使用したバレーボールの授業を事例として―，大学英語教育学会中国・四国支部研究紀要，16，139-156.

14）二五義博・伊藤耕作（2021）高専１年生に対する体育CLILの可能性(3)―英語を使用したバスケットボールの授業を事例として―，大学英語教育学会中国・四国支部研究紀要，18，87-104.

15）二五義博・伊藤耕作（2022）高専１年生に対する体育CLILの可能性(4)―英語を使用したパラスポーツの授業を事例として―，大学英語教育学会中国・四国支部研究紀要，19，79-90.

16）小林勝法・北徹朗・木内敦詞（2014）英語で行う大学体育の授業に関する実態調査報告，大学体育，104，72-73.

17）木内敦詞・小林勝法（2015）英語で行う体育授業，第３回大学体育研究フォーラム，43.

18）飯田祥明（2015)Physical Education in English，大学体育，106，33-34.

19）小林勝法・Kelly F. McGrath(2016)Key Phrases in PE Classes，第４回大学体育研究フォーラム，41-42.

20）Christopher A. Anne・Hisham bin Dzakiria・Abdul Halim bin Mohamed(2012)Teaching English Through Sports: A Case Study, Asian EFL Journal, 59, 20-29.

21）吉崎静夫（1988）授業研究と教師教育(1)―教師の知識研究を媒介として―，教育方法学研究，13，11-17.

22）久保田秀明・関田一彦（2002）英語による体育実技指導に対する心理的抵抗に関する一考察，創価大学教育学部論集，52，71-77.

23）常行泰子・長谷川雅世（2018）大学体育における学生のニーズに関する研究―英語によるCLIL導入の可能性に着目して―，高知大学教育学部研究報告，78：187-192.

24）岡沢祥訓・北真佐美・諏訪祐一郎（1996）運動有能感の構造とその発達及び性差に関する研究，スポーツ教育学研究，16(2)，145-155.

25）古田久・黒坂志穂（2010）大学生の運動有能感・運動参与・運動不振における相対年齢効果の検討，埼玉大学紀要，教育学部，59(1)，107-113.

26）池田広子・福森貢（2005）経営情報系大学生の英語学習と動機づけに関する一考察，京都創成大学紀要，５(1)，23-42.

27）牧野眞貴（2010）英語苦手意識を克服させる授業デザイン―スポーツ学生を対象として―，近畿大学英語研究会紀要，６，125-133.

28）Steve Jugovic（2006)Motivation in the English Classroom: Japanese Sport College Students，びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要，３，105-116.

29）金丸千雪（2009）スポーツ学部における英語教育の

改善に関する一考察，九州共立大学スポーツ学部研究紀要，３，21-27.
30）朴澤泰治・菊地博・鎌田幸雄・M．キーナート・Ｊ．パランギ・山口貴久・M．マンキン・石田照規・伊東宏之（2019a）「教育の質の向上」の視点からの体育系大学における英語教育の新しい試み（第二報），50(2)，30-60.
31）朴澤泰治・山口貴久・高橋仁・菊地博・鎌田幸雄・M．キーナート・Ｊ．パランギ・M．マンキン・石田照規・伊東宏之（2019b）「教育の質の向上」の視点からの体育系大学における英語教育の新しい試み（第二報），51(1)，45-62.
32）磯村美菜子（2021）マット運動の授業におけるCLIL体育の実践に関する研究，広島大学附属中・高等学校中等教育研究紀要，68，87-93.
33）三留規誉・碇智徳・伊藤耕作・三谷芳弘・島袋勝弥・根岸可奈子・茂野交市・中村成芳・三澤秀明・中岡伊織・苗馨允（2018）グローバル人材育成に向けたCLIL（英語を使った教科教育）の実践，宇部工業高等専門学校研究報告64巻，13-18.
34）Salvador-Garcia Celina・Chiva-Bartoll Oscar（2017）CLIL in teaching physical education: views of the teachers in the Spanish context, Journal of Physical Education and Sport, 17(3), 1130-1138.
35）岩田昌太郎・赤松一成（2019）双方向の能力が高まる“体育×英語”の授業「体育手段論」を超えて，体育科教育67(6)，26-29.
36）湯本和子（2003）カナダのバイリンガル教育・日本のバイリンガル教育：イマージョン・プログラムの概略と評価，神奈川県立外語短期大学紀要，26，１-29.

付　記

本研究は，令和３（2021）年度科学研究費助成事業（基盤研究Ｃ）（21K00783）の助成を受けて実施した研究である。